

令和6年4月2日 大石教育長 就任記者会見

教育長を拝命しました、大石と申します。

ご存じのように、一昨日まで学校現場におりました。私にとっては本当に大切な生徒たちと離れてこちらに来ることになりましたので、彼らに恥ずかしくないよう、精一杯務めたいと思っております。

1. 現在の心境について

学校現場から教育長を拝命するというのは、おそらく相当久しぶりなのではないかと思っております。そこで私に何が期待されているのかと考えますと、やはり子どもの視点で、或いは学校の目線で、教育行政をしっかりと前に進めていくということが期待されているのではないかと考えているところです。

弁護士で中坊公平さんという方がいらっしゃって、「現場に神宿る」とよく色紙に書いておられましたけれども、実際に学校現場に行ってみると、子どもたちの毎日の活動の中で、或いは先生方のご指導の中で見えてくるものがたくさんございます。

学校現場の前に教育行政に身を置く中でたくさん気づくことも考えることもございましたので、それを学校経営に取り入れてまいりました。これからは学校での気づきを教育行政に生かしたいと思っておりますが、奈良県の教育、子どもたちのために、できるだけ現場を知るということは今後も続けてまいりたいと思っております。現場から目を離さない、そういう教育行政を心がけたいと思っております。

2. 奈良県教育の課題、取り組みたいことについて

令和6年度に取り組む重要施策がいくつかございまして、これは前任から引き継いでまいります。いくつか例を挙げますと、教員の働き方改革であったり、教育委員会内における障害者雇用率の改善であったり、それから県立学校の整備などです。また、私が取り組みたいと考えていますのは、学校の魅力化です。

コロナ禍で全国一斉休校になりました時、私は学校教育課におりまして、家庭を離れて一定の集団で行う、学校という教育システムの意味を改めて考える機会がありました。勉強を知識の伝達ということだけでとらえれば、遠隔でもできたり、或いは1人でもできたりしますが、学校の学びはそうではありません。例えば授業だけ取りましても、先生は子どもたちの反応を見ながら、子どもたちは互いに励まし合いながら、或いは競い合いながら行われるものです。授業以外でも同年代や異年齢の集団で過ごす中で、共感する力といいますか、相手のことを思いやる力みたいなものが育まれます。家庭ではできない、学校でしかできないことは何なのかということを改めて考えて、学校教育がより充実したものになればと思っております。

また、私立高校の授業料無償化を受けて、県立高校の魅力化にも取り組まなければなら

ないと思っております。大阪では志願者数が2300人ぐらい減ったということで、本当に危機感をもたれて、入試の時期を早めるということまで言及されています。奈良県ではまだ分析が済んでおりませんが、中学校の生徒さんたち或いは保護者の方がどのように考えられ、どのような受験行動に出られたか分析しつつ、県立高校が魅力的でなければならぬと考えています。

3. 学校現場で気づいたことについて

1つは、授業はもっと生き生きしたものにはできないかということです。

もう1つは、前任校には定時制課程がありまして、私は初任のときにも定時制課程に勤務しました。当時の定時制は本当にエネルギーと言いますか、やんちゃな子たちがたくさんいたところでごさいまして、大学出たての私は本当に手を焼くぐらいの経験をたくさんさせていただきましたが、久しぶりに戻ってきた定時制は不登校の生徒が大変多くおりました。

定時制は小規模で、募集定員は40人ですがどの学年も1桁ぐらいの生徒数で、1日4時間、少人数でゆったりと、先生方も本当に手厚く関わられる、中学校で全く通学できなかったのが、そういう環境では来ることができるようになる子もいるんですね。もちろん毎日来られるようになる子もいれば、ちょっと頑張ってもやっぱり来られなくて、また励まされて足を運ぶというような子もいますので、それぞれのペースで頑張っていると思いますけれども、時が来ればと言いますか、必要な支援を受けて、その子のタイミングが来れば来られる子もいる。学校というのは、不登校の子どもたちにとってもっと期待していい場所なんじゃないかと改めて思いました。

不登校の子ども数が増えており、県教委としても様々な手立てをしているところですが、人生のはじめの相当な時間を過ごす学校に通う時間が苦しいものになってしまうのは本当に残念だと思っております。学校という場所を魅力化していくことが必要なのかなと思います。子どもたちにとって何がよいのかは個別に当たらないと正直分からないところはありますが、学校教育が関われるのであれば、関わりたいと考えています。